



第12期サステナビリティ経営研究会 第5回研究会プログラム報告

《テーマ》 『 自然資本会計 』



○応用講座 「自然資本に関する戦略立案と統合報告のための定量評価手法」

プライスウォーターハウスクーパースサステナビリティ株式会社

取締役 公認会計士 阿部 和彦氏

近年、世界全体のリスクが高まってきており、中でも自然資本に関するリスク（水供給危機、気候変動への対応の失敗、異常気象）が高くなっている。我々はエコシステムからのサービスによって生活しているが、そのストックである自然資本が、再生力を超えて使用され、失われつつあることが問題となっている。自然資本のビジネスリスクとしては、物理的（海面上昇や水質悪化、利用可能な水量の減少、健康被害など）、規制（GHG、水資源、土壌汚染など）、潜在的（調達コスト、需給逼迫など）がある。

上記の背景の下で、自然資本に関する戦略立案と統合報告のための定量評価が必要となってきた。サステナビリティ活動の金額換算のために、定量データを整理してモデリング等をしたうえで、金額評価をすることになる。環境損益計算書（EP&L）を策定することで、サプライチェーンのどこで、何に関して影響が大きく出ているかを評価することができる。成功事例として、プーマでは企業戦略の策定や新製品開発、外部への説明責任を果たすために役立っている。親会社のケリングは2016年までにグループ全体においてEP&Lを実施すると発表した。環境損益計算書作成による企業のメリットは、より効果的な戦略的意思決定のための情報、調達リスクを管理するための情報、事業活動による影響やその効果を説明する情報を得られることにある。影響度を貨幣価値により定量評価することは、戦略的意思決定、持続可能なサプライチェーンの構築、ステークホルダーに対する説明責任などに有用である。

TIMM は、環境、社会、経済、税金の総合的な影響度を金額により定量評価する手法である。統合報告にも使えるものである。この手法では、直接的のみならず間接的な影響も評価することが可能である。TIMM の対象範囲として、直接の企業活動、バリューチェーン下流、バリューチェーン上流、バリューチェーンの外部および影響を受けるコミュニティまで含まれている。評価のプロセスは、まず目的を明確にし、測定範囲を設定した後、データを収集し、分析する。データは、まず企業内のシステムデータを用い、さらに外部の追加データ（サプライヤデータや文献データ等）で補う。既にいくつかの企業で実施されている。

ESCHER は、サプライチェーンにおける自然資本（水使用量、土地利用面積、GHG 排出量）の影響を定量化するツールである。産業連関表(GTAP)でデータ化するトップダウンアプローチであり、地域別、産業別に評価できる。製品ごとではなく企業全体で評価する

ものであり、潜在的に重要なビジネスリスクや調達リスクを把握できる。開示目的に使用できる。欧州各国を中心に、日本でも複数の企業に対する活用例がある。また、国連が支援する責任投資原則（PRI）によるサプライチェーンにおける水リスクの分析調査においても活用された。PRIによるこの調査は米国においても高い評価を受けた。

#### ○企業事例報告『MHI レポート 2014』のポイントと今後の課題」

三菱重工株式会社 瓜生 振一郎氏

統合報告 MHI レポートは、2012 年から検討を始め、昨年 2014 年に第一回を発行した。アニュアルレポートと CSR レポートを統合したものだ。準備段階としてアニュアルレポートに ESG 情報を入れ込んだところ、好評を得たため、統合することになった。作業的には、2012 年 10 月 CSR と IR、広報が同一部内になったため、連携しやすい環境となった（2014 年 4 月より広報部は別組織）。

統合するにあたり、誰に向けて、何をどの程度、誰がどのように、という課題について検討した。すべてのステークホルダーを対象にすることを前提として、基本的には長期投資家に向けて作ることにした。

実際には、社内の各関係部署とやり取りをしていた CSR 報告書の作成システムを踏襲したため、やり取りがスムーズにできた。長すぎない 50 ページ程度を上限として設定し、読みやすくするためにストーリー性を重視し、CSR を全体に融合させることを意識した。役員メッセージにより、ビジョンや事業計画、現状と今後などについてメッセージを発信し、自社の強みである技術基盤を強調し、セグメント別の営業概況などを掲載した。

マテリアリティ特定に関しては、基本方針とプロセスの説明に留まり、後続ページとのつながりが不明瞭になったことは反省点ととらえている。また、近年大きく組織が変わったため、過去のデータとの連結ができないなどの課題もあった。協力部門に対して目的等の理解を得ることが非常に重要であると感じた。また、英訳についても課題となる。